

図書館と古本屋と博物館

『象院題語』のはなし

文学者にとっては古本漁りもフィールドワークの一つ。
 自らが価値を見出した文献をめぐる、図書館での出逢い、
 古書目録に起因する悲喜劇、そして博物館での再会について語る。

竹越 孝 たけこし たかし / 神戸市外国語大学

古本と文献学

文献学をやる人間にとっては、図書館や博物館に行くのが一種のフィールドワークみたいなものだが、それは古本屋についても言えることで、膨大な本の山の中から貴重な文献を自ら探し出したという思いは共通している。違うのは、古本の場合、いつどこで出逢えるかわからないという高揚感と、その裏返しの徒労感があること、そして運よく手に入れた場合に、自分がその所有者になれることである。もちろん、私蔵は「死蔵」につながるものだし、貴重な文献であればこそ、公的な所蔵機関できちんと管理され、万人に開かれているという状況が望ましいのは言うまでもない。ただ、貴重な本を自分の手元に置くことには抗いがたい魅力がある。

古本をめぐるのは、眼の飛び出そうな値段のものや有り金はたいて買ったとか、店主との息詰まる交渉を経て手に入れたというようなエピソード

よりは、むしろ安値で買ったものが大変な価値を持っていた、という話の方に断然憧れる。例えば、元・至大元年(1308)の序を持つ貫雲石の『孝経直解』は、儒教經典の『孝経』を当時の口語で訳したもので、アルタイ諸語の影響を強く受けた「漢兒言語」と呼ばれる文体で記されている。その言葉の特質から、中国語の歴史を書き換えるぐらいのインパクトを与えた文献なのだが、この天下の孤本は、故 林秀一氏(元岡山大学教授)が戦前名古屋の古本屋で偶然見つけ、二束三文の値で買ったものだという。自分にもいつかこんな瞬間が訪れないものかと思いつつ、日本でも海外でも、古本屋巡りに精を出すことになる。

北京とソウルの古本屋

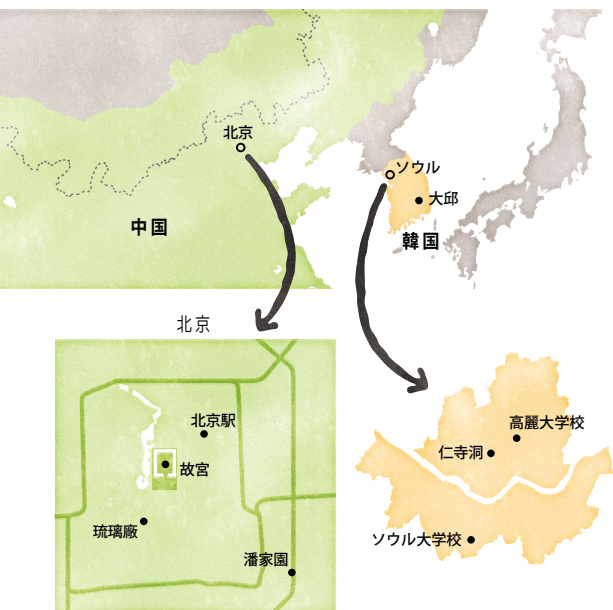
本格的に古本探しに目覚めたのは北京に留学していた1990年頃で、主なターゲットは前近代の線装本(糸綴じの本)である。当時古本といえ

リウリーチャン 琉璃廠の中国書店が定番だったが、目利きの多い北京のこと、貧乏学生に手の出せる掘り出し物などあろうはずもない。乏しい予算と相談しながら、清末から民国初期にかけての石印本(石版印刷という手法で作られた本)などを細々と集めていた。その後、北京を訪れるのは学会やシンポジウムなどの機会に限られるが、その合間には郊外の潘家園旧貨市場に行くのが通例である。ここには古本のスペースもあって、いつもあつという間に時間が経ってしまう。ただもちろん、空いた時間に訪れた程度の外国人に幸運が訪れるはずもなく、大物を釣り上げたためしはない。

中国語学の朝鮮資料、つまり朝鮮王朝時代に刊行された中国語関係の資料に関心を持つようになってからは、学会や文献調査でソウルに行くたびに、骨董街として有名な仁寺洞の古本屋に立ち寄る。その一軒である「承文閣」に初めて入った時、老齢の店主から、君はカンノ先生の学生かと聞かれ、東京外国語大学におられた菅野裕臣氏の弟子筋にあたる方々がいかに足繁く通っているかを思い知らされた。なお、専門家に聞いたところでは、朝鮮本の本場は何といても大邱だという。伝統的にソウルは胥吏が住む街であり、本物の知識人は田舎に住むのだそうだ。1998年に代表的な朝鮮資料『老乞大』の最古のテキストが大邱で発見されたのも、決して偶然ではないとのことである。

図書館での出逢い

これまで一度だけ、世に知られていない古本を手に入れるチャンスを掴みかけたことがある。17世紀後半の成立と思われる『象院題語』は、朝鮮王朝の通訳養成機関だった司訳院で使われた中国事情解説書で、明代末期の中国の様子が40節ほどの短文で綴られている。この書を手にとったのは2005年のことで、駒込の東洋文庫(東洋学専門の



北京市郊外にある潘家園旧貨市場の様子。いつも人でにぎわっている。

*写真はすべて筆者撮影。

研究図書館)に行った時、何の気なしに書庫から出してもらったら、中身が口語体の中国語だったので飛び上がるほど驚いた。慌てて複写を申請し、帰ってから調べてみると、この本に関する先行研究がほとんどないことがわかり、これは自分が学界に紹介しなければ、という気になった。

古本屋の目録

その翌日のこと、机の隅に積み上げてあったさる古本屋の目録を眺めていたら、何と『象院題語』が載っているではないか。しかも大した値ではない。関心がなかったから、今まで視野に入ってきたのである。即座にその古本屋に電話をかけ、つとめて平静を装いつつ、この本を買いたいので押さえておいてほしいと伝えた。その晩は、論文の末尾に「なお、本研究には架蔵本を用いた」という一文を加える自分を想像して、にやけつつ祝杯を挙げた。

ところが翌日、件の古本屋から電話がかかってきて、昨日の本は倉庫に見当たらないという。ふざけるな、だったら何で目録に載せているんだ、と湧いてくる怒りを押し殺しつつ、いやいや、もう一度よく探して下さい、お願いします、と何度言っても埒があかない。思い余って、今からそちらの倉庫に行くから自分に探させてくれと頼み込んだが、そんな無茶が受け入れられるはずもなく、泣く泣く引き下がるしかなかった。その夜は悔しくて一睡もできなかった。

嘆いていてもしょうがない。原本を所有する夢は潰えたが、この本は東洋文庫の他にも、東京外国語大学附属図書館、東京大学の小倉文庫、天理図書館などに所蔵されていることがわかり、友人の協力ですウル大学校の奎章閣キュジャンガクに所蔵される同書の複写も入手できたので、その年から翌年にかけていくつか論文を書いた。



潘家園旧貨市場の一角に並べられた線装本。

ソウル大学校構内にある奎章閣。王室関係の重要文書などが収められている。

ソウル・仁寺洞にある古本屋・承文閣。



高麗大学校博物館所蔵の『象院題語』の版木。右下に欠けた部分を補った跡がある。



関係の論文を集めて韓国で出版した『象院題語研究』。

博物館で版木に対面

その悔しさも忘れかけた2010年、思いもよらない幸運が訪れる。その夏、ソウルの高麗大学校で学会が開かれるのに合わせ、当時ソウル大学校に留学中だった杉山豊氏スヤマトヨシ(現京都産業大学)の協力を得て、前日を奎章閣所蔵本『象院題語』の調査にあてた。その後出席した学会では、最終日に高麗大学校博物館の見学というプログラムが組み込まれていて、同館に所蔵される司訳院旧蔵の版木

が展示されていたが、そこに何と『象院題語』の版木もあったのである。

『象院題語』の版木があると知ったら、急いで確認しなければならないことがある。それは最後の2葉に相当する部分の状態である。かつて書いた論文では、ごくわずかな違いではあるが、この2葉分に関して『象院題語』のテキストが二つの系統に分かれることを述べるとともに、その違いが生じたのは、版木の一部が欠けて補板したことになるのだろう、という予想を記していたのだ。

前日に奎章閣で見たテキストのイメージが湯気を立てそうなくらいホットな状態だったので、どれが目当ての版木かはすぐにわかった。その部分を見てみると…あっ、やっぱり補板した跡がある！杉山さんにはこの予想について話してあったので、「ホラ！言った通りでしょ！」「すごい、ホントですね！」と二人で手を取り合って大騒ぎになった。

おわりに

研究者にとって、自分がかつて立てた予想が証明されるというのはこの上ない喜びであり、ほんの些細なことではあるけれども、今回そんな胸の震えるような瞬間が訪れたわけである。あの悔しさがなければ、ここまで『象院題語』に執着することもなかっただろうから、これは神様の思し召しかもしれない。図書館と古本屋と博物館をめぐる文献探索の迷宮からは、これからも逃れられそうにない。

FP